毎　日　新　聞

2007年（平成19年）12月20日（木）　京都　22

切られたツルアジサイ（右は拡大図）。トチノキにはい上がっていた　＝02年11月撮影、芦生研究林提供

「木にからまり『絞め殺す』は誤解」

ツルアジサイを切らないで

生態系への影響、危惧する声

京都大・芦生研究林

京都大・芦生研究林（南丹市美山町）で、大木にからまって上へ登るツル性低木「ツルアジサイ」が人為的に切断される被害が時折確認されている。世界自然遺産の白神山地でもツルアジサイなど約220本が切断される被害が確認されており、関係者からは生態系への影響を危惧する声が上がっている。

同研究林によると、北部の「上谷」と呼ばれる原生林を歩くコース沿いなどで、トチノキなどに気根ではい上がるツルアジサイの幹が地面に近い位置でバッサリ切られる例が、4～5年前から見られるようになった。切り口が真っすぐなため、人間がナタやノコギリなどで切ったらしい。直径15センチもある立派な幹もあり、枯れてしまった株もある。

ツルアジサイは木に力強く巻き付いている様子から、「木を絞め殺す」と思い込む人もいるらしい。しかし、京都大農学研究科の岡田直紀准教授（森林利用学）は「そんな例は見たことがない」と否定。同研究林側も「人工造林と違い、ここは手つかずの自然林。何も持ち込まず、持ち出さずに観察を楽しんで」と呼びかけている。

また、約45年前から森に親しんできた「北山の自然と文化を守る会」幹事の主原憲司さん（59）＝右京区＝は「『絞め殺す』というのは誤解だ。善意で切るのかもしれないが、生態系が崩れるので絶対にやめてほしい」と訴えている。

【鶴谷真】